

【133】

|         |                               |
|---------|-------------------------------|
| 氏名      | 高木聰子<br>たかぎとしこ                |
| 学位の種類   | 医学博士                          |
| 学位記番号   | 論医博第148号                      |
| 学位授与の日付 | 昭和39年9月29日                    |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当                  |
| 学位論文題目  | 哺乳類リンパ組織における髓外造血              |
| 論文調査委員  | (主査) 教授 堀井五十雄 教授 西村秀雄 教授 岡本道雄 |

論文内容の要旨

著者はウサギ、モルモット、ネコ、イヌについて生直後から成熟に至る健常例の全身リンパ節の連続切片、May-Giemsa または Giemsa 染色標本の鏡検およびその結果の計数的処理によって大略次のことが明らかとなった。

1) いずれの個体においても、少なくともその1リンパ節に骨髓球巣(幼若好中球系または偽好酸球系細胞またはその Mitosis) のみられるものを十とすれば、ウサギ、モルモット、ネコにおいてはその検索全例(100%) イヌにおいては88%(25例中22例)に骨髓球巣の出現をみる。これによってみれば骨髓球巣の出現は決して異常条件下の出現ないしは病的状態におけるものであるということとはできない。それどころか骨髓球巣の出現はきわめて尋常の現象であるといえる。

2) 生後経過と骨髓球巣の出現の関係をみると、全般を通じてやはり若い個体に出現度の高い傾向はみられるが、その傾向はウサギ、モルモット、イヌではやや顕著であるが、ネコではあまり明らかではない。しかしながら全体を通じて成熟個体においてもたとえ小規模でもほぼ konstant に出現をみる。これによってリンパ節における骨髓球巣の出現は決して胎生遺残の現象ということとはできない。

3) リンパ節の種類、そのおかれた部位によって骨髓球巣の出現には、かなり明らかな差がみられる。検索したいずれの種類動物でも二次リンパ節では一次リンパ節に較べて明らかに骨髓球巣の出現度が高い。これは後述するごとく骨髓球巣が髓索に圧倒的に多い事実と思ひ合わせると、リンパ節においてもリンパ球生成の場と骨髓造血の場とが異なっておることを示唆するものではなからうか。

4) 骨髓球巣の出現様式については、全般を通じて髓索、しかも周血管性の出現が圧倒的に多い。ただし動物の種類によって若干の相違がみられ、イヌでは髓索のみ、ネコではまれに皮質に現われるがその二次小節以外の部、モルモット、ウサギでは二次小節、それも成熟型二次小節(Flemming型)の中枢極およびリンパ芽球部にみられ、ウサギはことに二次小節内出現の頻度が大であるが、それも髓索と二次小節との出現頻度を比較すれば髓索の方がはるかに出現率が大であり、ことにウサギの幼若例では、髓質は

骨髓球造血，皮質はリンパ球造血というふうに截然と分かれている例を多くみる。

以上 3) 項および 4) 項の点からみてリンパ節における骨髓球造血の場はリンパ球造血の場と異なるもので，本研究はそれぞれの芽球の問題を明らかにし得なかったが，やはり異なる由来のものとみる方が妥当と思われる。

### 論文審査の結果の要旨

著者はウサギ，モルモット，イヌ，ネコの生直後から成熟にいたる健常多数例の全身リンパ節連続切片の Giemsa 染色標本について，幼若骨髓球およびその Mitosis 巣の存否を検して，つぎのような結論をえた。

1) いずれの個体でも少なくともその 1 リンパ節に 1 コ以上の骨髓球巣の出現を十とすればウサギ，モルモット，ネコでは 100%，イヌでは 88% の出現率をみる。このことは幼若骨髓球巣の出現は異常の状態とはいえないことをものがたる。

2) 生後経過と骨髓球巣の出現との関係を見ると，やはり若い個体に出現度の高い傾向がみられる。

しかし成熟個体でも小規模ながらほぼ恒常的に出現する。このことからリンパ節における骨髓球巣の出現は胎生遺残の現象とみることはできない。

3) 骨髓球巣の出現度は二次リンパ節の方が一次リンパ節に比して一般に明らかに高い。

4) 出現部位については一般に髄索，しかも周血管性のものが圧倒的に多い。ウサギ，モルモットでは，なお，この他に二次小節内に出現する場合がある。

一般的にみて髄外造血巣はたとえ小規模でも必ずリンパ節に存在し，リンパ節におけるその場はリンパ球造血の主たる場とはことなっている。

本研究は学術上有益であり医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。